
すまない 良ら

瀧陸瑠璃*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すまない 良ら

【Nコード】

N4072M

【作者名】

瀧陸瑠璃*

【あらすじ】

らんま1/2の二次創作小説です。

脇役の響良牙と主役の女らんまの恋愛もの。

プロローグ（前書き）

王道CPの乱あじゃなく、マイナーもいいとこの良ら……。えっとですね、良乱…ではなく、良らんなんですネ！（ここ重要です）

だから、厳密に言うと、男同士のノーマルなんですけどボーイズラブ的な要素も含むかもしれないので、書いておきます。

まず、腐系の作品が嫌い、らんま1/2が嫌いOR知らない、二次創作が嫌い。

などの方は読まないことをお勧めします。

一応言わせて頂きますが、無断転載などは絶対にやめてください。

ブローグ

「ねえ…良牙くん。さっき、シャンプーたちが言ってたことなんだけど」

そう呟いたあかねさんの声は、今まで聞いたことのないものだった。もう少しだけ…彼女には知らないでいてほしかった。

彼女の涙は、おれもあいつも見たくないはずだから。まったく、運命ってやつは性格悪いぜ。

―猫飯店にて。（猫飯店は定休日設定です）

ずっと降り続いていた雨がやみ、テントをたたんで修行の旅に遠くの山へでも行こうとしていたら、何故かはわからないが、猫飯店の前についてしまったんだっけ。

猫飯店があるってことは、ここは東京！しかも、天道家の近くじゃないか！

よし、シャンプーか、ムースか、あのばあさんか、どちらか一人はいるだろう。

道さえ教えてもらえば、このおれでもどうにか辿りつけるかもしれない。

そう思ったおれは、何の気なしに猫飯店のドアを開いた。

プロローグ（後書き）

えー…ここまで読んでくれたあなた、ありがとうございます…。
ま、誰も見ないと思うんで、語っちゃうよ。

良牙×らんまの良さはですね、身長之差なんですね。

小柄で男っぽい女の子と、背は高くって、体格も良いけど、ヘタレ男子。

なんか良いなあ…とこれから始まっています。

もちろん、これを偽造カップルだ…って思う方もいらっしゃると思います。

昔、コ哀を書いていたときにも言われたことがあります。

そんなの、王道じゃないだから自分の頭の中で捻じ曲げてるだけだよって。

確かに乱あとは違いますけど、らんま1/2って、乱あと良あ（良牙×あかり）以外は公式とは言えないかもしれないんですよ。

東風×かすみだって、ムース×シャンプーだって、右京×子夏だって。

それに、恋の釣竿や、ハーブ編もあるやないですか。

それに所詮二次創作。

大きい気持ちで読んで下さいネ。

怒り（前書き）

場所は猫飯店です。

らんまは自由度が比較的高いんで、場所の説明とかは大雑把に。

怒り

「良牙っ、あかねかららんまに乗り換えるなんて、何を血迷ったあるか！？らんまはもともと男あるっ」

ガタッ！！

…近くにあるテーブルをぶん殴り、おれに怒りをぶつけるシャンプ

！。

テーブルの上の花瓶が揺れ、水が飛び散る。

そのことを気にするでもなく、軽蔑した瞳でおれを見つめいらいとくちびるを噛みしめている。

乱馬を好きだったシャンプーからすれば…辛い現実。

乱馬は男に戻れなくなっただ上に（多分、これでも悲しいはずなのに）、男と恋愛しちまってるわけだし。

しかも、相手はライバルだったはずのこのおれ。

「すまん、シャンプー…」

言い訳する言葉も見つからん。

「…わたし、あきらめないあるよ。まず、手始めに良牙、おまえ殺す…」

シャンプーの両手に例の武器が握り締められていた。

来日当初のように、ただ殺すことしか考えていない目。

「ま、待てよシャンプー…話し合いで決着を着けよ…」

「女傑族の女ナメる、怪我するネ…戦いたくないなら、今すぐ乱馬あきらめるよろし。そすれば許すね！」

きつとこっちをにらみつける瞳は涙で濡れていた。

「シャンプーやめるんじゃ！こんなブタと戦ってもいい事なんてないだよ！嫁にならおらが貰ってやるだ！あんなオカマのことなんて忘れ…」

新メニユーの試作でもしてたのか、厨房からムースがやってくる。
「うるさいある。アヒルは黙っていればいいネ。それからわたし、

おまえと結婚する気ないね」

そう言うと、シャンプーはテーブルの上の花瓶を手に取り、その水をムースにぶっ掛けた。

「ガアガアガア！！ガガガガッ！！」

（訳：何するだシャンプー！！まさか、まだ乱馬のことを！？）

「良牙！！おまえ、乱ちゃんと付き合ってるってほんまなんか！？
どういうことやねん！！」

「その男！！おさげの女のことはどうでもいいとして、乱馬様はどこですの！？」

げ…右京、小太刀…。

怒り（後書き）

うつゝ…ムースをもつと出したかったなあ…。
何気にムースが好き。
ムーも好き。

戦い（前書き）

女同士の仁義無き戦い…笑

あかねってアニメでは嫌いなキャラだけど、漫画だと良いよね！

戦い

どっから聞きつけたのかは知らんが、右京と小太刀が臨戦態勢で入ってくる。

「乱ちゃんの許婚はうちやで！」

「何を言っていますの？わたくしが乱馬様の許婚ですわ！」

「乱馬の許婚、わたしだけあるね！外野は静かにしてる、これ一番ね。」

シャンプーの発言にむっとしたような顔をして、右京が怒鳴る。

「シャンプー！今日という今日は許さへん！！ほんなら、乱ちゃんの許婚の座を賭けての、料理勝負と行こか！？」

「乱馬様の許婚勝負と聞いてはわたくしも黙ってはおれませんわ！
！その勝負…わたくしも！！」

あれ？もしかして、おれ、置いてけぼりか？

おれがなんとも言えない孤独感を感じていたとき。

「何盛り上がってんの、シャンプー？右京や小太刀もいるみたいだけど…もしかして、良牙くんもいる？」

きつと買い物の途中だったのだろう。

ビニール袋と傘を手に持って、あかねさんが猫飯店に入ってきた。

もちろん、あかねさんが入ってきたくらいで口論をやめるほどデリカシーのある三人ではない。

「はあ？これは、おさげの女とその響良牙っちゅーやつの問題や、小太刀には関係ないわ！！」

「そうあるね、小太刀はせいぜい行方不明の乱馬様でも探しとくが
いいある！！」

「何を言っているのです！！わたしはおさげの女とその男がお付き合いするのを手助けすれば、乱馬様とのライバルが減るからこうして…ああ、乱馬様！愛しの貴方はいずこへ？」

「何ごちやごちや言っとるねん!！」

「うるさいね、帰るよろし!！」

頭の良いあかねさんのこと。

一瞬で状況を理解し、その場で腰を抜かしてしまった。

戦い（後書き）

あと、良牙にとってのあかねって言うのは何時までたっても特別な人であってほしい。

たとえば、恋愛対象から外れても敬語で話しちゃうとか。見得張っちゃうとか。

良い人（前書き）

にしても、あかねの鈍感さって書きづらいですね…
コメディ要素を入れようと思って寝下呂企画聞きながらの執筆（笑）

良い人

—なんか、公園的な場所にて

腰の抜けたあかねさんを連れて、何とかあの三人から逃れ…

とりあえず、遠くへ！—と思つて、見知らぬ公園に来たはいいが、何だか見覚えがある気がする。

まあ、気のせいだろう。

ベンチに座ると、あかねさんが気まずそうにおれを見る。

「…すまない、あかねさん…僕が好きなのは…らんまなんです」

そう呟いたおれを見つめる彼女の顔が青く、血の気を引いていく。

「良牙くん…嘘だと言つてよ…彼女がいないから誰でも良くなつちやつたんだよね？」

そうでしょ、と頼み込むように、おれを見上げるあかねさん。手にもった桃色の雨傘に体重をかけ、辛うじて倒れていないって感じがする。

ショートカットの美しい人。涙をためたその瞳を、おれが拭く資格は無い。

もちろん、あかねさんを慰める資格など。

「…前みたいに、違うつて言つてよ…ねえどうして？何でらんまなのよ…開水壺のことは…良牙くんのせいじゃないのよ？あれは…らんまもハーブも悪かつたし、良牙くんは十分頑張ってくれたじゃない…あ、ほらあかりちゃん…雲竜あかりちゃん？好きだったんでしょ、彼女のこと」

「彼女は…なんて言えいいのか…恋人とは違うんです」

そう、あのおきのおれは恋に恋してた部分があつたのかもしれない。「でも、らんまじゃなくても良かったんじゃないかしら？だって、良牙くんはすつごく良い人だし…きつと、普通の彼女ができると思うわ！」

…そうだ。おれはずっとこの人を好きだったんだよな。

あかねさんのことが大好きだった。

鈍感で、優しくて、それでいて一途で。

彼女のためなら、命を捨てることも惜しくない、彼女に会うためなら、どんな辛い旅も修行も辛くない、耐えられると思えた。

良い人（後書き）

良牙の「僕」と「ですます調」が好きです。

あと、らんまとの間にたま〜にある「しょうがねえな」って感じの
雰囲気。

涙（前書き）

この作品は、いわゆる二次創作であり、若干腐要素を含みます。
おまけに、マイナーCPです。

それでもよろしければ、どうぞ読んで下さい。

涙

だが、2、3ヶ月前くらいだったか？

恋敵だった乱馬をつぶすためにムースと付き合ったハーブとの戦い。そのとき…確か、旅館でムースが落とした旅費のために働いていたときだったつけ。

あのアヒル野郎、リュックの代わりにたぬきの置物を背負ってやがった。

まあ、ド近眼に荷物を任せたこっちにも非があるかしらんな。

客が寝静まり、仕事を終わらせおれとらんまとムースの三人で風呂に入った。

もう一ヶ月くらい働いているから、仕事にも慣れ、水に気をつけつつこなせるようになって来た頃。

おれもムースも残念ながら女性との恋愛経験が少なくて（…ほぼ皆無）らんまの裸（男の女体と言ってもだな、いろいろあるんだ）を見ないように背中合わせて湯に浸かり話していた。

その時…あの負けん気が強いらんまがぼろつと小さな声で漏らしたんだ。

「おれ…男に戻れんのかな。ちゃんと開水壺見つけれんのかな。くそっ…もうこのままずっと女のまんまなのか？何で、こんな事に…なっちまったんだよ？…あん時中国なんかにはいなかったら…すまん、お前らのせいじゃねーのに…もう、愚痴なんて言わねーから」らんまの目からこぼれた涙が湯船に滴り、波紋を広げていく。

「何を言ってるんじゃ、乱馬。おらと良牙がついておるんじゃ…しつかりせん！」

なあ、良牙？と自信たっぷりの顔でこちらに笑いかけてくるムース。

「え？…ああ。愚痴くらいならいくらでも聞くぞ」

おれは…ムースみたいに自信を持って笑えなかった。

あまりにも…らんまが弱っちく見えた。

おれにだって容易く勝ってしまう乱馬とイメージが合わなかった。

「お前ら…ありがとよ」

そして、おれたちの言葉に儚げな微笑みを返したらんまは、信じられないくらいに綺麗だったんだ。

シャンプー一筋のあのムースが認めるくらいにな。

涙（後書き）

ムース…何気に好きです。

あの瓶底めがね…どこで買ったの???

あと、日本語…どこで習ったの???

なんせ、瀧陸はロングの黒髪が好きみたいです。

銀魂の桂しかり、けいおんの澪ちゃんしかり、名コナの宮野明美さんしかり。

心は移り変わる（前書き）

この小説は、二次創作であり、腐要素を多少ながら含み（男女のB
L）ます。

上記のどちらかに嫌悪感を感じる方は読むのをお勧めできません。

心は移り変わる

もともと、おれはあかねさんが好きだったんだ。

そうだ、そうだったよな。

なのに、おれはあいつに恋をした。

「らんまじゃなきゃ、ダメなんだ……」

あいつじゃないと……もう、ダメだ。

「そんな……確かに、らんまはもう、ずっと女の子のままだけど、だ
つて……」

ザ……ザザ……静かに雨が降り出す。

ヤバい。このままじゃPちゃんになってしまう。

あかねさんが傘をさしたのを確認して、自分の番傘を開く。

もう、あかねさんは何も言わなくなった。

まるで、喋ることを禁止する法律でもあるかのように、雨音だけが
……聞こえる。

おれたちの横を通り過ぎていく自転車の音が、虚しく響く。

金属でできた硬い番傘に銃声のような音をたて、雨粒が降り注ぐ。

あかねさんの桃色の傘はビニールでできてるので、太鼓を叩くよう
な音が響く。

その沈黙を破ったのはらんまだった。

「……あかね！良牙！何してんだよっ！こんなところで」

遠くからぶかぶかになった靴を手に持って、びしょびしょのらんま
が走ってくる。

真っ赤なおさげ髪。白い肌と大きな瞳に、小さなくちびる。

おれたち二人を見つけたのがよっぽど嬉しかったのか、白い歯を見
せ、満面の笑みで空いた方の手をぶんぶん振っている。

その笑顔が、おれたちに近づくにつれ沈んだ表情になっていく。

こっちの雰囲気を感じたのか、あかねさんの悲しげな表情を見てし
まったのか。

「あれ？ど、どうかしたのかよ、二人とも何か変だぞ？あ、…まさ…
…か、良牙言っちゃまったのかよ？」

その言葉におれは小さく頷く。

自分の体が濡れるのも構わず、らんまはおれとあかねさんの数メートル手前で立ちすくむ。

「何だよ…あかねに恋人が…ほんとの男の…もう、どこにも行かない彼氏ができてから言うつて…」

「言い訳する言葉もねえよ、らんま…」

「約束…してたじゃねえかよ…」

心は移り変わる（後書き）

サブタイトルが…思いつかないです。

らんまの時代設定を現代にするべきか…

サンデー掲載当時はメル友じゃなくペンパルだからね 笑

女？（前書き）

この小説は、二次創作要素、腐系要素を含みます。
上記のものがお嫌いな方は読むことをお勧めできません。

女？

あいつだけは、苦しめたくはなかったのに。

あかねを好きだった気持ちは嘘なんかじゃなかった。

ホンキで好きだったから…だから。

おれは男に戻れなくなったとき、あかねをこれ以上苦しめたくなかったから。

戻ってくるはずもない男の姿…。

乱馬なんかを待たずに、幸せになつてほしかったから。

だから…はやく恋人作れつて言つたのに。

完全な女になつてから早数ヶ月。

月の物も来て、おれ女なんだなつて実感してた。

このまま、体も心も女になつていつて…そのうち男だったことも忘れちまうのになつて。

そんな風に思いながら、毎日を過ごしてた。

そしたら、おれが良牙のことを好きだつてことが…あかねにバレた。

おまけに、良牙もおれが好きだと言つちまった。

せめて、あいつが否定してくれてたら…

あかねの中で、らんまのライバル・友達⇨響良牙の図式がまだ成り立ってたかもしれないのに。

なんで…こんなことになつちまったんだよ。

おれは…ただ、強くなりたかつただけだったはずじゃねえかよ。

良牙⇨おれのライバル。男子校時代の友達。

その答えは変わらないはずだったのに。

女の体のときは、方向音痴でヘタレの良牙に堪らなく、母性本能つてやつをくすぐられた。

なんか…救つてやりたいって思つちまう。

そんなはずねえ、おれはあかねが好きなんだつて。思い込んでたのかもしれない！。

そう思うことで、良牙への思いに蓋をした。

もう、おれは早乙女乱馬じゃなくて早乙女らんまなんだよな。

「あかね…ごめん」

そう呟いたおれの頬にあかねの平手打ちが決まった。

いてえ…貧力虚脱炎のときより、数倍いてえよ…

ホント…可愛くねえし、色気がねえ。

けど…好きだったぜ。

女？（後書き）

らんま独白。

これを書いたときのBGMは「可愛くねえ色気がねえ」でした（笑

R15じゃなくても良かったかしんねえな…

だいたい、R15やったら作者自身も引っかかってるし。

諦め（前書き）

この小説は二次創作であり、腐要素を含みます。
上記のものが嫌いな方は見ることをお勧めできません…。

締め

「そうよね…」

ほんとはわかってたのかもしれないね、あたし。

らんまが女の子のままになって薄々、もう許婚ではいられないことは気づいてた。

女の子のままになってかららんまがどんどん女っぽい顔するようになつて。

良牙くんがあつても喧嘩しなくなつたし、Pちゃんを見てもイジメなくなつた。

あたしの知つてた早乙女乱馬がどうか行っちゃう気がして、すごく寂しかった。

だけど、あたしはあいつが好きだったから。

男とか、女じゃなくて、人間として好きだったから。

気が強くて、意地っ張りで、喧嘩っ早くって、ちよつとバカで。それでも、優しくて、カッコ良くて。

ごめんね…らんまの幸せ、考えてあげないとね。

あたし、いつつバカみたいに意地張つてて。いつつ、ケンカばかりしてた。

その日、らんまはあたしに気を遣つたのか、良牙くんの家に泊まつて行つたらしい。

あたしがほつぺた叩いたあと、走つて逃げて来ちゃったんだけど。ぼうつとしながら歩いて家に着くと、涙が溢れてきた。

乱馬がいたときと変わらないあたしの家。道場。らんまとおじさまの部屋。

ピンク色の傘が、そこだけ幸せそうにあたしを包んでて。

こんなに悲しくなるなら、らんまと会わなきゃ良かったのにつて。お互いのこと何にも知らなくて、らんまは中国で修行。

あたしは、この東京で高校生して、普通に恋愛して、普通に結婚し

て。

そんな風だったら、良かったのかもしれない。
そんなことまで思った。

その頃には雨が一段と強くなって、手を緩めたら傘がとんでいき
そうなくらい風も強かった。

カメラかまえてけらけら笑ってるなびきお姉ちゃんも、穏やかな笑
み浮かべて野菜切ってるかすみお姉ちゃんも、パンダの状態で将棋
してるおじさまとお父さんも、全部が全部幸せそうで…哀しくなっ
た。

『？』と看板で会話してくるおじさま。

「何にも、無いです。おじさまかすみお姉ちゃん、今日ごはんいら
ないから…」

自分の隣にらんまがいない食卓虚しさなんて、味わいたくないわ。

「あらあら、まあ。どうかしたのかしら」

次の日。

昨日がうそだったみたいに太陽が頭の上で輝いていた。

あの出来事も嘘だったら良かったのに。でも、まさかそんな風には
行く分けない。

「あかねっ！らんまくんがっ！！」

やかましいくらいのお父さんの声がして、目が覚めた。

「何？」

「良牙くんと、うちに来てる！！」

冷水を浴びせられたみたいに目が覚める。
まさか…。

締め（後書き）

あかね、独白。

早雲の喋り方がわかりゃん…。

にしても、玄馬は何でパンダなんでしょう…。

本気（前書き）

この小説は二次創作であり、若干腐要素を含みます。

上記のものに違和感、嫌悪感を感じられる方は読まない事をお勧めいたします。

ちなみに、文章力はありません。

本気

柄にも無く緊張する。

おれと良牙の前には泣きそうな顔のあかねと、冷たく笑ってるなびき、おろおろしてるかすみさん。

そして、今にも殴りかかって来そうなおれの親父と、こっちを睨み付けてくるおじさん。

「それで？何のようだね、こんな改まって
一字一字噛みしめるようにおじさんが言う。」

「…お義父さん、娘さんを僕に下さいっ！！！！！！」

「親父、頼む！」

おれと良牙が同時に土下座する。

「あらあら、どうしましょう？」

「ちよつとあんたねえ…何ふざけたことを…」

「良牙君！？」

「乱馬！お前と言うやつは！！」

「やつぱり…本気なんだ」

あかねがそう呟くと、ふらつと畳に倒れ込んだ。

「あかね、大丈夫？…ちよつとらんまくん？この埋め合わせは、ちよつと…高くつくわよ」

なびきがあかねを抱き起こしながらおれたちをキッと睨み付ける。

「あかね！！」

「…あかねさんっ」

と、叫んで駆け寄ろうとしたおれと良牙を早雲のおじさんが抑える。

「そうっとしておいてくれ…らんま君」

「おじさん…」

「もう、出て行ってくれるかしら」

あくまでもばわんとした顔と雰囲気で頬に人差し指をあてかすみさんが呟く。

ある意味…誰よりも怖いかもしれない。

「そうよ、出て行きなさい。早乙女のおじ様も。そのついでに、現金と通帳も置いていきなさ…となびきが言う。」

「やめんかー！！」

むくつとあかねが目を開けて起き上がり怒鳴る。

「あ、あかね、もう大丈夫なのか！？」

「…らんま、もうあたしは引き止めたりはしないわよ。修行の旅でも、新婚旅行でも行けばいいわ」

あかね…ごめん。

「でももう…女に戻る可能性がないのなら、悩まないで精一杯女の幸せ勝ち取りなさいよ！あたしの分も、良牙さんと幸せになりなさいよ！あたしのことなんて、全然気にしないでいいんだから…」
そう言ったあかねの顔は、笑っていたけど頬には涙の痕がついていた。

そんな痛々しい笑顔。

こんな顔をあかねにさせたのは他でもないおれたちだ。

「すまねえ…」

おれと良牙は頭を下げて、逃げるように天道家を後にした。

本気（後書き）

本当はここで終わる予定だったのですが、あと一話続きます。
良らんを書くのは初めてでおっかなびつくり書いていたのですが…
楽しんでいただければ嬉しいなあ*^^*

エピソード おかえり（前書き）

この小説は二次創作であり、若干腐要素を含みます。

上記二つどちらかがお嫌いな方は読まないことを推奨いたします。

エピローグ おかえり

数年後：

東京のとある道を、真つ赤なチャイナ服に身を包んだお下げ髪の女と、ところどころ継ぎ接ぎがされた黄色い服を着た八重歯の青年…そして、二人によく似た小さな男の子が歩いていた。

「また、良牙のせいで道に迷ったから二日も遅れちまったじゃねーかよ！」

「わ、悪いらんま。年をとるごとに方向音痴がひどく…」

「そんな言い訳おれには通用しねーぞ。大体、まだ二十歳だろ！しかも前からずーっと方向音痴だろ！」

「かーさん、とーさんとばっかしやべんな」

「あれ？良馬はやきもちか？」

「うつせー！とーさんは黙ってる！この方向音痴！」

「良馬だつて方向音痴じゃねーかよ？」

「…とーさんのバカあー！！うえーん！！」

「良牙！！大人気ない…たく。男はすぐケンカするからダメなんだよ。ほら、二人とも騒ぐな！目立ってるぞ」

「「はい」」

仲良さげに言い合う若い両親と子供に、通行人たちは微笑んで通り過ぎていく。

もちろん…その三人とは…

修行の旅の途中で身籠つて中国でおれと良牙の子供、良馬を産んだ。良馬を育てながら修行を続けたおれたちは、ひさしぶりに日本に帰ってきた。

「かーさん、ここどこだよお？」

そうぐずる良馬は、八重歯とおさげの四歳児。

おれと良牙の良いとこばっかあげたからなあ…

「ここか？ここはな、かーさんととーさんの生まれた国だぞ。良馬

もまだ赤ちゃんだったころに来たことがあんだけど…憶えてねえか」
「そうだったなあ…良馬、ここは全然知らない場所だから、一人で散歩に行ったら駄目だぞ。迷子になって帰って来れなくなるかもしれないからな！」

「お前が言ったって」

まあ、良馬は良牙に似て方向音痴なんだが。

相変わらずシャンプーを追っかけているムースからのやけに字がデカイ手紙によるとあかねたちはまだ誰も結婚はせず、天道家にいるという。

おれの親父は、おふくろと一緒にのんびりと老後を送っているらしい。

二人には良馬が生まれたときに会わせたつきりでたまに電話をするくらいだ。

「乱馬、あんたも女の子になったんだから、女らしくなさいね」

「こんど帰ってくるときは男溺泉を持って来るのだぞ」

親父はいつもそれしか言わねえけど。

たく、子供を少しくらい心配したらどうなんだっての。

天道家の前に着いた。

「良牙…入るか」

「…」

「なんだよ、お前が先に行けよ」

「…らんま、やっぱり帰らないか」

「…親父んちに泊めてもらおうか？」

「かーさん、ここに泊まるのか？」

そう言っただけで良馬は勝手に門から入ってしまった。

「おい、ちよつと待てっ！」

「そ、そうだ…まだ心の準備があ…」

「おーい！誰かいるのか？」

良馬の声に誰かが気づいて玄関から出てくる。

「…あらあら、誰かしら？どこかで見たような…坊や、お名前は？」

あの声は… かすみさん。

「おれ、響良馬！あかねって人に会いに来たんだ！おねーさんはかーさんの友達か？」

あつちや… あいつ名乗っちまった。

慌てておれと良牙も玄関まで走る。

「あ、あの！かすみさん、おれです… 早乙女らんまです」

「まあまあ…」

「その、挨拶が遅れて…」

「遅くなつて申し訳ないです！その… もう一度あかねさんに謝罪を入れに…」

「乱馬くん… じゃないわね、らんまちゃんに良牙くんじゃない。久しぶりねえ」

息子さん？と言いながらかすみさんが良馬の頭をなでる。

かああつと良馬の頬が真っ赤に染まっていく。

まったく、わかりやすいやつ。誰に似たんだか。

「あ、はい。お、お久しぶりです… その、あか… あかねに会いたいです」

「おれからもお願いします！」

「あらあら、かしこまっちゃって。もう誰も怒ってないわよ？」

え？でも… あの時は。

「みんならんまくと良牙くんが来たわよ」

どどどどど…

真っ先に走ってきたのはあかね。

最初に会ったときみてーに髪の毛を伸ばしてる。

「らんま…」

次に走ってきたのはおじさん。

「らんまくん…」

そう言いながら下を向いたと思ったら、その顔は涙と鼻水でぐしょぐしょだった。

「うちからお嫁に出すって言ってたのにごめんねー！！」

「…お父さんうるさい。たく、あんた挨拶遅いのよ」
そう言いながらなびきが歩いてくる。

「みんな、待ってたのよ」

そう言うのと、かすみさんがにつこりと微笑んだ。

「ありがとうございます」

その笑顔でおれの中のかなかがとれて、涙が出てきた。

「えぐっ…おれたち、ひでーことしたのに…ほんと、ごめんなさい
…ありがとう」

おれが泣き出したのを見て、良馬がびっくりしてる。

「かーさん泣くなよ！」

「そ、そうだぞらんま。泣くな！」

「だって、良牙…」

『みつともないぞ、乱馬』

げしっ！なんか硬いもんで頭を叩かれる。

「いてえ…な、何しやる！」

そう言って目を開けた先にいたのは…

『玄馬だよーん』

と書かれた看板を前足に持った、パンダの姿だった。

「親父…」

「お、お義父さん…お、お久しぶりです」

「このパンダがおれのじいちゃん!?」

「はい…おじさま、やかん」

そう言ってなびきがやかんのお湯を親父にぶっ掛ける。

「おお、すまんな」

「パンダが…じーさんになった」

良馬がぽかーんと口を開いてる。

「この子からんまくんの息子？へえ、可愛い顔してんじゃないの」

「ほんとねえ…弟にしちやいたいわあ」

天道家の姉二人は放心状態の良馬のほっぺたをつつついたり、頭を
なでたりしてる。

「おかえり…らんま。久しぶりね、良牙くん」
「…た、ただいま、あかね」

エピソード おかえり（後書き）

良牙 + 乱馬 = 良馬。

…キャラ崩壊してる。

しかも全体的に。

こんな駄文でも楽しんでくれた方が一人でもいいのになあ……
いんのかな。

また今度手直ししてブログにもUPしたいと思います。

最後にここまで読んでくださった方、ありがとうございました。

そして、良らんよ、もつと広まれ！！！！！！！！！！

瀧陸瑠璃でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4072m/>

すまない 良ら

2010年10月11日04時43分発行